

# 歯界名作劇場

## ◇◇◇ 濫造門 ◇◇◇

或る日の夕方のことである。ひとりのまだ若い歯科医が、出身大学の正門前で途方に暮れていた。

広い門の傍には、この歯科医の外に誰もいない。

若い歯科医「教室に残った同窓生に見つからんように、掲示板の求人募集を覗いてみたけれど、なかなか条件の合うのはあらへんかったなあ。」

この国では、かつて虫歯の洪水と呼ばれる時代があった。そして社会からの要請を受けた歯科医は誉れ高い人気の職業でもあった。しかし疾患構造の変化と需給予測を見誤り、次々と歯学部が新設され、またいつまでも歯科医の濫造を繰り返した結果、歯科医師大過剰という事態を招き、歯学部の正門は遂には「濫造門」と呼ばれるようになった。

この数年、歯科界には、診療報酬改悪という激震とか、指導や監査という辻風、歯科医過剰が極まった結果の飢饉とかいう災いが続いて起こった。

歯科界の寂れ方は一通りではない。衛生士や技工士は逃げ出す、メーカーも撤退を繰り返す。そして残された歯科医の間には居抜き物件がうず高く積み上げられた。

するとその荒れ果てたのをよいことに、狐狸が棲む、盗人が棲む、わけのわからんセミナーが蔓延する。とうとうしまいには、引き取り手のない歯科医師志望者は、この濫造門の中にとどめ置かれるという始末にもなった。

若い歯科医「しかし、アホな院長がつまらん投資になんか手を出すさかい、医院まるごと逝ってしもうて、お蔭で三十過ぎにして就職活動やがな。大学にはポストなんかある筈もないしなあ。」

その時、若い歯科医の眼に、こちらへ向かって歩いてくる風采のあがらない初老の男の姿がうつった。

初老の男「にいさん、タバコ一本もらえますか？」

若い歯科医「いや、僕タバコ吸いませんし。」

初老の男「それなら火は？」

若い歯科医「いや、タバコ吸わんのやから、火も持ってません。」

初老の男「それなら仕方がないなあ。シュボツ、スッパー！」

若い歯科医「なんや！タバコも火も持ってはりますやん。」

初老の男「もらいタバコに、もらい火で、ちょっとでも儉約しようと思ひましてな。」

若い歯科医「えらい、ケチなおっさんやなあ。」

初老の男「おっさんとは失礼な。こう見えても、わたしはこの出身者ですよ。」

若い歯科医「え〜、先輩ですか？いったい何してはりますのや？」

初老の男「実は失業中の身でして、ここにでも来たら、職が見つかるかと思うて。」

若い歯科医「いや、僕もそうなんですけど。でも先輩、先輩のお年やったら、みんな開業してはるのと違いますの？」

初老の男「まあ、つい最近まで診療所を構え、インプラントとか手広うやってたんやが、昨今の過当競争の渦に巻き込まれて、というわけですわ。」

若い歯科医「へえ〜、インプラントとか結構勉強もしてはったのに？」

初老の男「いや、インプラントいうても、通信教育やけどな。」

若い歯科医「うそつけー、んなもんあるか！」

初老の男「いやいや、腕の方には自信があったんやけど、なんせ口下手が災いして・・・」

若い歯科医「さっきいから聞いとったら、詐欺師になれるくらい口がうまいですやん。ほんまですかあ、腕が良かったって？」

初老の男「それは、ヒ・ミ・ツ・・・」

若い歯科医「いったい何考えたはりますの！先輩、僕も勤め先の歯科医院が倒産して、途方に暮れてますんや。もうちょっと真面目な話をしてもらえますか。」

初老の男「まあ、就職先やったら、この歯科の雑誌に・・・」

若い歯科医「ちょっとすみません、見せてください。へえ、結構ありますやん。なにになに？あー、〇〇県××市、分院長急募！経験者歓迎！歩合が・・・」

初老の男「あ～、それは・・・」

若い歯科医「先輩、いや、おっさん！悪いが、この本もろうたで！」

若い歯科医は、奪い取った雑誌を脇に抱え、瞬く間に逃げ去った。

初老の男「はあ～、分院長の言葉につられて、あの男も悪い物件つかまされたり、おかしい借金こしらえんかったら、ええんやけどなあ。」

初老の男は、つぶやくように、またうめくようにひとりごちながら、もうすっかり黒くなった空を見上げた。

若い歯科医の行方は、誰も知らない。

【参考文献】芥川龍之介全集第一巻（岩波書店 1995 年）P.145－154「羅生門」

※全集買ったんだから、許して下さい。

※それから、これ単なる作文ですから。